

ENGAWA

平成25年度 第4号



特集・減災体験ツアー報告会レポート

2014年1月25日、『中高生気仙沼復興ツアーチェンジ報告会』が、南区の可美公園総合センターで開催されました。浜松市立東部中学校の生徒31名と静岡県立浜松江之島高等学校の生徒5名は、昨年8月、東日本大震災の被災地である気仙沼市を訪問しました。今回の報告会は、そのツアーを終えた生徒たちが現地で見たこと・聞いたことをぜひ浜松で伝えたいという思いから実現したものです。あわせて、名古屋大学の川崎浩司准教授による津波被害についての講演会も開催されました。

当日は、ツアー中に現地を案内してくれた小泉自然楽校 校長の阿部寛行さんも駆けつけ、生徒たちの報告を見届けました。来場者の中には思わず涙を流す人の姿も見られるなど、生徒たちの力強いメッセージが伝わったようでした。中高生は、被災地で学んだ“減災”について、浜松市民にどのようなメッセージを訴えたのでしょうか。今回は、この報告会のようすを紹介します。



『中高生気仙沼復興ツアー』にて、被災した海岸を散策する生徒たち。

“減災体験ツアー”で、 中高生が感じたことは？

あなたは普段、災害に対してどんな意識を持っていますか？いつか来ると思っていても、実際浜松で災害が起きたらどうなるのか、被災後はいったい何をすればいいのか、イメージできている人は多くないと思います。

今号では、実際に東日本大震災の被災地を訪ねた中高生が被災地での実践活動から学んだ「減災」について、次世代の声をお届けします。

東部中学校 生徒からのメッセージ



小島 知恵美さん（3年）

わたしたちが想像する以上に、震災が現地の人々に与えた影響は大きく、それが心の傷となっている。

学校の2階まで波が押し寄せてきたこと、周囲が火の海になったことを聞き、地震の怖さを知った。



桑山 寛隆さん（3年）

来る来るといつて来ない東海地震に、どこかで油断してはいないだろうか？

学校でも避難訓練をしているが、生徒の間でも、地震に対する意識に差があるように感じている。



竹内 紅葉さん（3年）

地震が来たら、まず落ち着いて行動すること、なにがあっても自分の命は自分で守ること。集団行動を大切にし、自分勝手な行動はしない。

まわりの人と協力し、助け合い、支え合うことの大切さを教わった。



梅田 未緒菜さん（3年）

民泊先では多くのことを教えてもらい、元気をもらった。

目で見て感じたことや、現地の方から聞いたことをたくさんの人々に知ってもらいたい、震災を風化させないようにしたい。



立石 映さん（3年）

臨機応変に行動できれば、自分だけでなく、他の人の命も救うことができる。

そして、生きている今を、自分らしく、楽しく、精いっぱい生きる必要があると、被災地から学んだ。



伊藤 萌さん（1年）

震災は他人ごとではないと思った。なにかできないかと思い、整備が進む防潮堤の樹木を自分たちで育てるにした。御前崎から拾ってきた種子を、校内で育てているので、3年生になったら植栽したい。



水谷 圭太さん（1年）

自分たちが東北から学んだことが、校内や地域の皆さんに広がってきていている。この活動を東部中の伝統として引き継ぎ、東北の方々との絆を深めていきたい。そして東北への修学旅行が実現するといいと思う。



水谷 優太さん（2年）

現地に行ったことで、浜松の防災対策にも関心を持つようになった。

いざ災害が起こったとき、地域の力となっていくのは僕たち中学生。今自分になにができるかを考えていかなければいけない。



ツアーで学んだことを報告する東部中学生。



2013年8月、被災地の現実。

『中高生夏休み減災体験・民家民泊体験交流プログラム』と題し、中高生は気仙沼市の本吉地区を訪ねました。

避難所生活が体験できる小泉自然楽校では、校長である阿部寛行さんの指導のもと、被災講話や野外炊飯を実施。また地元の方に市内を案内してもらい、「復旧」すら進んでいない現状を、目の当たりにしました。

中学生は民泊先で、被災当時の様子や避難生活について生の声を聞き、高校生は簡素な施設に寝泊まりし、飲み水も満足に得られない、不自由な生活を体験しました。



静岡県立浜松江之島高等学校
3年 石黒 歩海さん

「あなたの地域の避難場所、把握していますか？」

江之島高校3年生の石黒さんは冒頭、「（震災から）時間が経つにつれて、（中略）わたしたちの記憶からは、少しづつ、あの恐怖が薄れていっている」と来場者に投げかけました。そのうえで、ひとつでも多くの命を守るために大切なのは、「地震への知識と危機感」であると、強く訴えました。

東日本大震災の衝撃から3年。わたしたちは、災害が明日来るかもしれないという危機感を、今も持ち続けているでしょうか？高校生の問いかけが、聴講者の心に強く刺さりました。

「大人の方々のお力添えが必要です！」

「防災意識の高い浜松していく先頭に立つのは、わたしたちのような若い世代です。今回、活動だけで終わるのではなく、次へ次へと繋いでいきたい。」と述べた石黒さん。

地域を守りたいという高校生に対して、わたしたち大人はなにができるでしょうか？

「今日ここにいる人が、小さいことでもいいから自分にやれることを見つけ、それを実行に移してくれたら嬉しいです。」と、高校生は報告を締めくくりました。



「減災は未来を守る明るい言葉」

川崎准教授は中高生の発表に“とても感動した”としたうえで、『やはり子どもたちの頃から防災教育が必要。』と述べました。防災・減災というと暗くネガティブな印象を受け、つい目をそむけがちです。しかし川崎准教授は、『子どもたちの未来をつくるという意味で、明るく前向きに考えてほしい。』と大人の意識を変える必要があることを訴えました。

川崎浩司 准教授
(名古屋大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻)



被災地から学ぶ。

阿部さんのお話しによると、『小泉は隣家の台所に勝手に入るのが当たり前なほど、親密な近所付き合いをしていた。犠牲者の割合は他地域よりも少なかったが、3年が経った今でも、周囲は被災当時のまま。』だと言います。東北を見る限り、個人のつながりだけでは、復興へはかなりの時間がかかるでしょう。

いざ震災が起きたら、そこに住む人みんなが被災者です。しかし、市民活動団体は、ただの被災者になるのではなく、真っ先に復旧・復興へ動き出す役割を担っていることを、意識しておいてほしいのです。

浜松市内には、NPO法人だけで230を超える団体が存在します。いつか必ず起こる災害のために、団体同士が日頃から連携をとり、減災へと取り組む。それが子どもたちの未来を守り、浜松を守ることに繋がるのではないでしょうか。



小泉自然楽校 校長の阿部寛行さん

Check !



○写真展開催にご協力ください！

今回、中高生気仙沼復興ツアー報告会と同時に、ツアー中のようすをまとめた写真展を開催しました。中高生の体験活動や、報道では流れない被災地の姿などを紹介し、パネルの前では多くの来場者が足を止めました。

今後もツアーの取り組みを続けていくため、写真展の開催および募金活動に協力していただける団体・企業・店舗などを募集中です。詳しくは以下をご覧ください。



●展示内容

浜松市立東部中学校と県立浜松江之島高等学校の生徒36名が、8月19～21日に気仙沼を訪ねたときの活動写真と、その際、震災から2年半が経過した現地のようすを写した写真を貸し出します。

●募金箱の設置

今後、さらに多くの中高生が減災体験ツアーに参加できるよう、活動資金に充てるための募金を募ります。（写真展にあわせて実施）

- ・サイズ：縦20cm×横29cm
- ・枚 数：84枚 ※縦に5枚1組（写真参照）
- ・展示場所：屋内の壁面や掲示用のパネルなど
(テグスが吊るせるところ)

《展示場所の例》

- ・銀行のロビー
- ・イベント会場の一画
- ・協働センター、区役所
- ・各種店舗・・・など



今回の減災体験ツアーおよび報告会は、多くの地元企業・行政・市民や市民活動団体の協力を得て実施にこぎつけることができました。

今後も若い力を育てていくため、多くの方のご協力をお待ちしています！

お問い合わせは浜松市市民協働センターまで。

3月22日～31日まで、市民協働センター1階サロンにて、同様の展示をおこないます。詳しい展示内容を知りたい方は、この機会にぜひご来場ください。



発行 浜松市市民協働センター 〒430-0929 浜松市中区中央一丁目13-3

電話 053-457-2616 FAX 053-457-2617

[HP] <http://www.machien-hamamatsu.jp/> [E-Mail] kyoudou@machien-hamamatsu.jp